

● 7月11日(日) 晴 狩場山 道の駅「よつてけ島牧」泊

・昨夜はしとしとと雨が降っていて外は水浸しだ。空には雲があるが青空もちょっと見える。5時起床。夜中には6台泊まっていたが、今は隣に広島ナンバーの車が止まっている。私と2台だけの寂しい朝を迎えた。中年のご夫婦だが顔を合わせても話がない。これも寂しいかぎりだ。

天気予報ではこれからの天気は安定しているという。とにかく狩場山へ登ることにしよう。

朝食と朝の支度を終えてから、昨日と同じ道を賀老高原に向けて登っていった。キャンプ場を通り過ぎて少し行ったところに狩場山登山口の広場がある。7時半に着いたがもう4、5台の車が止まっている。

やはり日曜日だな。地元の指導員らしき方が巡視の準備をしていた。声を掛けてくれて山の状況などいろいろ情報を得ることが出来た。

・7時40分に出発、まず広い林道を歩いた。ところが林道を行けども行けども登山道にならない。ガイド地図を何回も確認するが、方向は間違いない。そのうちに林道が荒れ始め草が生い茂り、ヒグマの足跡や糞が現れてきた。「こりやおかしい！」と40分近く歩いた地点で引き返した。ヒグマのテリトリーに踏み入れてしまった危険を感じ、クマよけの鈴をガンガンジャラジャラ鳴らしながら必死で逃げ戻った。

・駐車場から林道に入りすぐ橋を渡るが、その橋に通行止めの道路標識が立ててある。私はその標識は車の通行止めだと思って、その横を通ってしまったが、橋の手前右側に立派な登山道がついていて「狩場登山道入口」と書いた立派な柱が立っていた。林道に行くものだと思い込んで、この標識が全く目に入らなかった。単独行はここが怖い！約一時間のロスをしたが、無事でよかった。

・少々遅くなってしまったが8時40分に再出発。今度はしっかりとした登山道を間違いなく登りに着いた。途中日差しはあまりなく時々霧がかかったりしてあまり天気はよくない。出発が遅くなったのもうだれも見えない。ひとり黙々と登った。二時間近く歩いて真駒内分岐で一休み。近くに雪渓があり花が一杯咲いている。黄花のミヤマキンポウゲやフギレオオバキスミレが一面に咲き実に綺麗なところだ。



登山口駐車場



林道と通行止めと登山口



真駒内分岐の上の雪渓



フギレオオバクスミレが一面に



ミヤマキンポウゲ

・雪渓を登ったところで今朝お会いした指導員の方が下りてくるのと出会った。「あなたが最後です。上には誰も居ないから気をつけて」といわれた。でもまだ11時前だよ、一人なら静かでもいいよ、と心の中で思いながら挨拶してすれ違った。しばらく行くと道の真ん中に新しいヒグマの糞が一つ、あまりいい気はしない。急坂を登って尾根筋の9合目に出ると、尾根の西側は雲が無くみごとに晴れていて、狩場山山頂へのルートがくっきりと見えた。やったね！



尾根へ出ると霧が晴れて南狩場を越えて狩場山へのルートが現れた



・南狩場を越えると後は山頂までなだらかで広々とした稜線だ。散在する雪渓の周りには黄花のミヤマキンポウゲやフギレオオバクスミレや、白花のイワイチョウなどが咲き乱れ天空のお花畑だ。

ルンルン気分で写真を撮りながら高原を歩いて11時半に山頂に着いた。



狩場山山頂

・山頂には途中で私を抜いていった大阪のおじさんが休んでいたのので記念写真を撮ってもらい、いろいろ話しましたが、まもなく私を置いて下っていった。静かな山頂と広大なお花畑が私一人のものになった。昼食をとり写真を撮って回ったりしてゆっくり景色を満喫し、12時前に下り始めた。

・私の下りは早い！ 13時半に駐車場に無事帰還した。当然私の車だけが1台ポツンと止まっていた。要するにもう周りには誰もいない。

おかげさまで人目を気にすることなく素っ裸になって、汗だらけのシャツから下着まで全部着替えた。ただ蚋がメチャメチャ多くて、群がって攻撃してくるのには閉口した。アースジェットを撒きながら草々に退散してキャンプ場まで戻った。昨日と同じく水道で汗まみれの衣類を洗濯し車に吊り下げて干したが、先ほどまで出ていた太陽が雲に隠れてしまった。下り道の途中にある昨日も入った千走川温泉に今日も寄り、ゆっくりと入浴しくつろいだ。



賀老高原キャンプ場の水道で洗濯

・今夜の止まりも道の駅「よつてけ島牧」と決め昨日と同じところに車を止めた。相変わらず車は少ない。ビールを飲みながらパソコンを出して写真の取り込み・整理をし、日記を書いている。隣に湘南ナンバーの車が止まり、若夫婦が話しかけてきた。「同じ湘南ですね」と。でも「まだ時間も早から道の駅「てっくいランド大成」まで行く、と行って出て行った。今日もこの駅に止まるのは私1台か。駅の管理人が出てきたのでいろいろお話をし「今夜ここに泊めていただきます」とお願いした。

寂しいが泊ってみるとなかなか良い駅だよ。まだ明るいのにもうビール3缶空いた。

\*今日は良い日だった。

明日は大千軒岳の基地、松前まで行こう。天気が悪いようなので移動日だ。

● 7月12日(月) 大雨 移動 (松前は晴) 道の駅「松前」泊

・夜半から猛烈な雨が降り出した。雨音で眠れないほどのすごい降りだった。  
朝7時現在まだ雨が降り続けている。日本全土雨が降っているという。  
ワールドカップはスペインがオランダに勝って優勝したと知っている。この春スペインに旅行したので懐かしいが、スペインは今さぞかしお祭り騒ぎだろうと想像できる。  
昨夜のうちに隣に岐阜ナンバー8888の黒いハイエースが来て泊っていた。中年のおじさんの一人旅でこれから先たびたび出くわすことになる。

大雨のため車から外へ出られないので車内で朝食を済ませた。(納豆巻き、牛乳、野菜ジュース)

・今日は大千軒岳の登り口、松前へ向けての移動日だ。今回残す山は大千軒岳一つになった。  
とうとう最終章が始まろうとしている。

・真っ黒な空から大雨が降り注ぐ中、2泊もお世話になった道の駅「よってけ島牧」を後にして松前へ向けて出発した。最初に寄った道の駅「てっくいランド大成」は月曜日休館。ここから先は日本海に沿って海岸線を走る国道228号線を松前に向けて南下する。次の乙部町の「229元和台」はなかなか大きくて立派な駅だった。ただ中に入れば素晴らしい駅のように見えるが今日は休館日の上大雨が降っているため車が1台もない。灰色の立派な建物がまるで牢獄のように見えた。



牢獄のように見えた「229元和台」

次は江差だがその前にちょっと東へそれて厚沢部へ寄った。次に寄った江差は思ったよりこじんまりした小さな町だが、にしんに沸いた昔を思わせる独特の家並みが並んだ歴史を感じさせる街だった。

上の国を通過してどんどん南下し松前に近づくにつれて雨が上がり青空が顔を出してきた。昼過ぎに松前の町に入った。ここは青空で真夏の太陽が照り付けて暑い。海岸に沿って細長い駐車場を持った昨年新たに施設された道の駅「北前舟松前」にとりあえず駐車した。海の向こうに青森の竜飛崎が見える。隣町の福島へは竜飛崎から青函トンネルが通っているのですぐ目の前だ。



道の駅「北前舟松前」

・天気は不安定で晴れたかと思ったら突然黒雲に覆われたりして、雨は降らないが海から吹きつける風が強い。車が痛まないか心配だ。現在低気圧が通過中らしく、明日は安定して晴れるらしい、期待しよう。道の駅のレストランを覗いたら、海鮮料理がいっぱいで旨そうなものが並んでいる。さっき納豆巻きを食べたばかりだが、殿様丼(980円)を食べた。満腹、満足だ。

・明日の大千軒岳は登山口まで延々1時間以上も林道を走る。このところの雨続きで林道がどうなっているか状況を確認するため松前町役場へ聞きに行った。林道の管理は「森林現業所が行っている」と紹介され、5km以上も先にある「森林現業所」へ走った。「うちは林道の入り口10kmだけ管理していて、それから先は<森のくらし>が管理している」と市役所のそばの役所を教えてくれた。なんというたらい回しか！また5km以上戻ってやっと情報を得ることが出来た。「今のところ林道の異常報告はない。」よし、明日は大千軒岳へ登るぞ！

・まだ早いので松前城を見学に行った。350円払って面白くもない松前屋敷を見て、だだっ広い敷地内を散歩した。桜の名所らしくいろいろな種類の桜が敷地にいっぱい植えてあり、1000mにわたる桜の街道がある。大山桜もあった。春の桜の時期はさぞきれいだろうと思った。道の駅の駐車場は海風が強かったので、ここの公園で泊まれないだろうかと見て回ったが、水道やトイレの設備が不便なので、やはりあきらめて道の駅で泊ることに決めた。



松前城



面白くもない復元松前屋敷



・道の駅に戻り泊りの準備を始めた。16時を過ぎたのでそろそろ夕食に取り掛かろうとするが、昼に食べすぎて腹が減っていない。風が強くて車が揺れる、食器が飛ばされそう。焼き鳥と松前漬けを肴にビールを飲み始めた。周りには車の出入りはあるが泊りそうな車はない。しばらくすると隣に沼津ナンバーのダッジのかいキャンピングカーが止まった。何千万円もしそうなすごいやつだ。中年の夫婦とおばあさんが乗っていて今日はここにお泊りだという。これで今日の泊りは2台になった。続いて昨夜島牧で隣に泊った岐阜ナンバー8888のおじさんがやってきた。ここ泊りかと思ったら「今日は福島まで行く」と言って出て行ってしまった。

・まだ6時過ぎで明るい、風は強いしやることないので明日の大千軒岳を夢見ながら寝床に入った。

\*昨日登った「狩場山」と明日登る「大千軒岳」は、今年で4回目になる北海道山紀行を始めたときから携行しているガイド本である、山溪の「花の百名山」に載っている山で、毎年登ろうとしていたが、道南という不便なところにあるので、なかなか実現できなかった夢にまで見た山である。